

【論文】

大分市の戦災復興に関する調査研究 その5
-石川栄耀による復興大分市と上田保の評価について-

A Study on the Post-war Reconstruction of Oita city

日高 圭一郎*¹
Keiichiro HITAKA

Abstract : This paper has mentioned about the evaluation of Oita city after the post-war reconstruction and UEDA Tamotsu, a mayor of Oita city who led its reconstruction. The evaluator is ISHIKAWA hideaki, urban planner. It was understood from this study that original idea of Mayor UEDA is highly evaluated.

Keywords : *Post-war Reconstruction, Oita city, UEDA Tamotsu, ISHIKAWA hideaki, Shisei*
戦災復興, 大分市, 上田保, 石川栄耀, 市政

1. はじめに

これまで、筆者は戦災復興後の大分市(以下、復興大分市という。)と、大分市の戦災復興を主導した上田保大分市長(以下、上田という。)が、当時、どのように評価されていたかについて、収集できた文献情報等に基づき、考察を行ってきた。

2021年度の拙稿¹⁾では、当時の文化人らによる復興大分市の評価について考察を行った。本稿では、その評価者の一人である都市計画家の石川栄耀(以下、石川という。)の復興大分市に関わる論評を詳細に分析し、考察を行っている。

分析と考察の対象とした石川の論評は、「名都の表情条件と分類」である。これは、1954年に当時の全国市長会が発行した機関誌「市政」²⁾に掲載されたものである。

この論評は、石川が没した1955年の前年の1954年に発表されたものであり、最晩年のものになる。また、1954年は、大分市の戦災復興が概ね完了した時期でもある。

2. 「名都の表情 条件と分類」について

(1) 「名都の表情 条件と分類」の構成

「名都の表情 条件と分類」は、大分市を含む複数の都市を対象とした論評であり、石川による「名都」の都市美構成に関する考えが示されている。

「名都の表情 条件と分類」の構成を示す。()には各

章・節の文字数^{註1)}を示している。

- 一、名都の条件 (3256)
- 二、日本名都抄 (10599・(一)～(一〇)を含む)
 - (一) 松江市 (1319)
 - (二) 盛岡市 (1209)
 - (三) 釧路市 (835)
 - (四) 札幌市 (891)
 - (五) 大分市 (954)
 - (六) 萩市 (702)
 - (七) 新潟市 (2214)
 - (八) 尾道・三原・福山市 (938)
 - (九) 熱海・別府・伊東市 (791)
 - (一〇) 那覇市 (587)
- 三、名都分類 (1004)

石川は、第一章で「名都」の条件を示し、第二章では、その条件に見合う国内の14都市を挙げ、それぞれの都市美について解説している。第三章においては「名都」の分類を行い、各類型について解説し、最後に、自らの考察を述べている。

(2) 石川栄耀による「名都」の条件

石川は、「名都」の条件を、第一章にて以下のように示している。

第一に、そのどれもが美しい水をもっている。美しい海岸

*1 建築都市工学部建築学科

か、湖辺か、或いは流水が都市に接しており、それが家並の中に埋もれることなく、余裕ある緑で保護されている。

第二に、そうでない場合、これに代る美しい公園乃至緑道が市の中心にある。

第三に、市民の「登高、展望」し得る丘が市の周囲にあつて、その都市を抱いている。

第四に、美しい建築が造型的に集結しているか、水景に望むか、山腹にあつて、余情を残している。

第五に、歴史・教養・人心のどれかに関する市民感情が、ソコハカとなく市中を流れている。

以上の条件については、欧米の都市にはあてはまるが、後進的な日本においては、以下に示す都市美構成の技法が必要としている。

名都の条件吟味が、些か低迷した形となった。とまれ「条件」上述の如しとして、後進性にあるわが国の名都は、更に次の如き条件強化を必要としよう。

一、丘陵と水辺の保護。確然と緑地によつて修飾すること。

一、丘陵及び水辺が乏しいときは、中央公園・緑道・広場を以て代えること（乏しくなくても、望ましい）。

一、同系建築の造型集結、景観配置（水辺・丘上）をすると共に、建築の意匠特に配色に注意すること。

一、可能な限り建築と緑地・緑道による都市美の軸及び緑地系列を明らかにすること

一、重要な史蹟（文人遺蹟）は保護し、市民の親和に必要な施設乃至その教養向上に要する施設を交通便利な地域に設置すること等。

恐らくこれは、ヨーロッパ、日本を問わず都市美構成手法の最大公約数とすべきものであろう。

以上が、石川が示した「名都」の条件と、日本における都市美構成の技法である。

(3) 石川栄耀による「名都」の分類

石川は、「名都」の分類について、第三章にて以下のよう示している。

三、名都分類

以上、取り敢えず顕著な幾つかの名都を並べて素描してみた。

そして、これが次の三つにわけられそうなことに気づくのである。

甲 松江形式のもの

○盛岡 ○釧路

京都・福岡・宇部等

これは、水陸両景軸が判然としている。

ただ、この他に水景軸が郊外にずれ地帯美的な形になつてしまった、これの変形とも称すべきもの、及び水景軸の弱い

ものがある。

仙台（前者の例）

津（後者の例）

この形式のものを景軸形式と言おうか。

乙 札幌形式のもの

○大分

八幡

これにも景軸がないとはいわないが、むしろ造型性の方が強いので、造型形式と言った方が当らう。

丙 萩形式のもの

この形式のものは、景観地域の組立てによつて、境域を育み出すのである。

○新潟

この形式は、前期二つが企画的なのに対し、多少なりとも自由性をもっているので、自由形式乃至地域形式と呼ぶのが適当であらう。

丁 尾道形式のもの

この形式は、高所よりの展望に景観上の特質をもつ、いわば展望形式のものである。この場合、もちろん山水の条件は具備されていなければならないが、特に建築の色彩が大きく物をいう。

○熱海○別府○伊東○那覇

函館・神戸等

（○印は、名都として典型的なもの）

以上四形式のうち、甲と乙とが構成的であり、丙と丁とが状態的であるとも言える。

よつて、これを大きく

構成美的な名都と

状態美的な名都と

に分けるべきかも知れない（そして前者にヨーロッパ系の香りがあり、後者に東洋的な香りが強いとも言えそうである）。

かく名都の分類を終つたところで、私はもう一度前に述べた名都条件論に帰りたい。

それは、このように幾つかの都市を現実分析して来ると、日本の都市美の性格につき再応の吟味を試みたくるのである。

それは、この論の初めに述べたような日本の都市美が欧米の（というよりは、ヨーロッパの）それに比し後進的であるという考え方に対し、むしろ「日本の都市が、ヨーロッパのそれのように造型的に的確でないことが却って動的な、新しい形態にあることを物語るのではないか」ということである（絵画におけるポナールの）。

むしろ、そこには都市計画に対する低文化、社会性というようなことに対する厳しい批判に込められた反省は要る。しかし「新潟」を見て以来、何か後進性だけでは言い切れないものがあるのを感じたのである。

—むしろ、さればといつて、初章の立論を顛そうというのではない。或いは、民族に対する感傷がそうさせるのかも知れ

ないからである。

以上が、石川による「名都」の類型化である。大きく、「構成美的な名都」と「状態的な名都」があるとしている。さらに、「構成美的な名都」は「甲 松江形式のもの」と「乙 札幌形式のもの」の2類型に、「状態的な名都」は「丙 萩形式のもの」と「丁 尾道形式のもの」の2類型に、分類している。復興大分市は「構成美的な名都」で「乙 札幌形式のもの」と位置付けられている。

3. 石川栄耀による復興大分市の評価

(1) 復興大分市の類型

石川は、復興大分市を「札幌形式のもの」とし、「構成美的な名都」と評価している。さらに、この形式については、景軸は弱い造型性が強いとし、「造型形式」としている。この「造型形式」については、札幌市、大分市他、当時の八幡市を挙げているが、八幡市の論評は示されていない。札幌市に関する論評は以下のとおりである。

(四) 札幌市

人はよく札幌を推賞する。しかし、その証左と考えられている街路網に関する限り、自分は常にとらない。それに関する限り、これは何の奇もなき、実に寒々しい、荒涼たる基盤割にすぎない。北風のときは、顔もあげられまい。

第一、端景のない直線道路は、都市美的に世界的な評価が済んでいるはずである。

その冷たい眼で札幌を見ているうちに、いつしか「にも拘らず、ここに」存外な美しさがあることが解つて来た。

しかしその重点は、大通りと称する緑地帯である。これが、駅正面通りに直角につけられている。この大通りがワシントンのコツピイだというのが、ただ建築的にはそれほどの留意は払われていない。春から秋にかけて花壇になり、遊歩場になっているときは、稀なニュアンスである。

この大通りが、駅前通りを切つて創成川に交わる。その交点に北海道開拓庁時代の建物たる豊平館がある。配置は誠に拙ないが、一応の所に位している。創成川は沿岸を緑の絨毯で飾りつつ北上する。

これが都市美構造の軸である。敢えていうなら、この両者が水系・陸景両軸ということになるであろうが、創成川を水景軸とするのは、少し扱いすぎになるかも知れない。しかりとすれば、これは明らかにルネッサンスの手法である。

この都心部の核をめぐつて、南に中島公園、北に北大がある。

また駅と大通りとの間に道庁・植物園、更に円山公園が開いている。

ただ市の東部は、豊平川といい、白石町といい、全然アクセントがないが、遥かに月寒の牧場が緩やかな傾斜を保っている言わば言える。また、それを更に北上すれば、石狩川が

ツンドラから砂丘へ、そして北海へと悠久な水を流している。そこには、啄木の歌つたハマナスの花が、砂混りの風に吹かれている。

かくて二度、我々は「厚手」な、奥行のある名都にぶつかつたことになるのであるが、ただ、その総べてが（円山公園と石狩川と月寒は別として）人為的な構成であり、結局道庁の位置もワシントンのなところがあるところから見て、これはやはり日本に稀なルネッサンス形式のものとなすべきであろう。従つて自分はこれを前述の一連と別にし、第二の範疇にしたいと思うのである。

以上が、石川による札幌市の論評である。「大通りと称する緑地帯」、つまり、現在の「大通公園」を高く評価している。次に、大分市に関する論評をみよ。

(五) 大分市

大分は明かに札幌系の都市である。

或いは、札幌よりも近代的だとも言える。

この駅前広場は広々として取つてあり、正面道路が三六米で張られている。これに沿うてアーケードのついた商店街が現出する。

正面道路の真中どころで、これに東西にまた広路が出来ている。この第二の広路に沿うて城があり、その中に県庁がくすぶつている。城の外部に、堀に沿つて市役所その他の官公舎が集結されている。

しかし、これまでは平凡である。平凡でないのは、この城から直北に（従つて駅正面道路に平行に）緑道があることである。広路の中央が花壇であり、その中どころに級友朝倉文夫作の滝廉太郎像がある。その姿誠に柔かく、級友の愛が全身を包んでいる。

些か斜に構えて、椅子にかけた三十有歳の音楽家の姿はこのままに、今は若い子女をして恋わしめるに足る。何れにせよ「この彫刻を思いついた人」「これを彫つた人」達の生涯の傑作でもあろう。大分はこの像があるが故に、また、その緑道があるが故に、我々にも懐かしき都市になる。

大分市長は、かなりな行動派と聞き及んだが、その行動の底には、滝廉太郎に通う詩があるものと見た。

彼の構想になる全国の名木を集めたジャングル公園（子供達が勝手につけた名）、小品の如き公園墓地。それに彼が建設前に必ず色彩の調和をするという、その効果の美しいモデルスクール、火葬場など、宝石のように全市を飾っている。

特に市長の奇才は、高崎山公園という別府との間の海岸沿いの丘の山猿をなづけて、文化財としてしまったことである。

和かい秋光の中に、人を人ともせず戯れている猿族は、見事な観光財である。猿の一匹は全群のリーダーであるという。彼はその威を示すべく、尾を軽く上にあげている。

また、その一匹は全群の安危を背負つて、看視に当つている。看視猿は一段高い石垣の上に、人間の投げる餌には眼も

くれず、小賢しき眼を八方に配っている。

相撲をとる子猿。高い杉の木の天辺で呑気な展望をほしいままにしている猿。屋根の上をシタリ顔に歩き廻っている猿。猿々々。誠に輝かしき猿の世界である。

これあることの誠によいかな、である。

この郊外に、更に「荒城の月」の作曲の対象となった城郭があるはずであるが、行かなかつた。しかし別府の俗に対し、大分の知性は郊外の隅々にまで活々と通っている。

以上が、石川による大分市の論評である。

札幌市、大分市については、戦災復興を含む近代期に造られた都市美を、石川は「造型形式」とし評価している。

札幌市は、現在の「大通公園」を評価し、大分市については「遊歩公園」を評価している点に両市の共通性がある。八幡市についての論評はないが、推測するに「八幡国際通り」を評価し、同類型としたと考えられる。

石川は自著³⁾で、都市美構成の技法として「造型式構法」を、以下のように示している。

造型式は都市美技法の中建築群を主体とした公館地帯、住居地帯、住居地帯乃至文化地帯（生産地帯に対し）等を構成する手法である。これは一定の法則なきままに、原始都市計画以来発達し、ルネッサンスで完成を遂げ、尚何等かの形式を転ぜんとする傾向を見せているものである。

ただそれらの手法を通じ結局

美観広場 美観道路（緑道） 水路 主要建築物彫刻等の適正な組合せが根幹を成していることは解される。

つまり、「美観道路（緑道）」を持つ、札幌市、大分市、八幡市を「造型形式」の「名都」とし、評価をしたものと考えられる。

そうであれば、名古屋市の「久屋大通」、「若宮大通」、仙台市の「定禅寺通」、四日市市の「中央通り」等を同類型として挙げていないことには疑問が残るが、札幌市、大分市、八幡市の共通性からは、公園や緑道・緑地をともなった広幅員街路による都市美をもって「造型形式」の「名都」と位置付けたものと考えられる。

さらに、石川が名都とした14都市のうち、市長の特徴について触れているのは、大分市だけである。大分市については、都市美の評価に加えて、当時の市長、つまり、上田に注目し、その取組を高く評価していることが確認できる。

(2)「名都の条件」と復興大分市の照合

「名都の条件」と復興大分市の論評を照らし合わせると、復興大分市については、主に第二、第五の条件に該当するように考えられる。

市の中心に公園や緑道が整備されており、第二の条件を満たしている。

さらに、緑道には滝廉太郎の銅像が設置されている。一方、郊外には山猿を手懐け、文化財化を図った高崎山がある。独創的な公園の発案や公共施設の色彩指導を行う知性的な市長がいる。つまり、歴史・教養・人心に関する市民感情が市中を流れているという第五の条件を具現化しているのが、この銅像や高崎山、さらに市長であり、石川は、それらを高く評価したと考えられる。

4. まとめ

石川栄耀による「名都の表情 条件と分類」にて、復興大分市がどのように評価されていたかをみてきた。

まず、石川は復興大分市を「札幌形式のもの」とし、「構成美的な名都」と評価している。また、造型性が強いとし、「造型形式」の「名都」とも位置付けている。この「造型形式」の「名都」は、公園や緑道・緑地をともなった広幅員街路による都市美を構成していることが特徴として挙げられる。復興大分市については、「遊歩公園」が高く評価されている。

さらに、石川栄耀は、都市美の評価に加えて、当時の大分市長、つまり、上田保に注目し、その取組を高く評価していることが確認できた。

注釈

1) 文字数は、Microsoft Office Word を使用して計測した。空白は含めていない。

参考文献

- 1) 日高圭一郎：大分市の戦災復興に関する調査研究 その3-復興大分市と上田市長に対する評価について-、九州産業大学建築都市工学部研究報告、第4号、pp. 13-20、2022年3月。
- 2) 石川栄耀、名都の表情 条件と分類、市政 第3巻 第1号、pp. 22-34、1954年1月15日。
- 3) 石川栄耀、新訂 都市計画及び国土計画、産業図書株式会社 改訂3版、1957年5月20日。
- 4) 中島直人、西成典久、初田香成、佐野浩祥、津々見崇、都市計画家 石川栄耀 都市探求の軌跡、鹿島出版会、2009年3月20日。
- 5) 高崎哲郎、評伝 石川栄耀 〈社会に対する愛情、これを都市計画という〉、鹿島出版会、2010年4月20日。
- 6) 仲間浩一、牛島宏、八幡市の戦災復興都市計画における八幡駅を基点とした景観軸形成について、土木計画学研究・講演集 Vol. 29、2004年。
- 7) 佐々木葉、名古屋の百メートル道路-戦後における空間ストック利用とデザイン-、国際交通安全学会 Vol. 23, NO. 4、1998年3月。
- 8) 越澤明、復興計画 幕末・明治の大火から阪神・淡路大震災まで、中公新書、2005年8月25日。